日本医史学雑誌　第四十九巻　第三号　目次

原著

ガレノス『神経の解剖について』――ギリシャ語原典からの翻訳と考察……坂井建雄、池田黎太郎、月澤美代子……四〇三

太田黒玄淡の阿蘭陀外科免許状とその背景について……ヴォルフガング・ミヒェル、杉立義一……四五五

昭和二十四年の岩ケ崎接種結核事件について――GHQ文書と日本の資料……渡部　幹夫……四七九

ひろば

医史学者・思想家　ペドロ・ライン・エントラルゴ……泉　彪之助……四九三

資料

フランス人医師が見た明治初期の日本――私立新潟病院初代外国人医学教師ヴィダルの旅行記「新潟から江戸へ（日本）」……須長　泰一……五〇一

追悼

鹿子木敏範先生を悼む……岡村　良一……五五九

記事

例会記録

例会抄録

天台大師の医学……杉田　暉道……五六三

書籍紹介

榊原悠紀田郎『歯科保健医療小史』……新藤　惠久……五六四

八木剛平・田辺　英『日本精神病治療史』……昼田源四郎……五六五

松木明知『華岡青洲の新研究』……高橋　均……五六七

日和田邦男編『高血圧研究の歴史』……藤倉　一郎……五六八

江川義雄『広島県医人伝　第三集』……原田　康夫……五七〇

青木正和『結核の歴史』……中村　昭……五七一
山田慶兒『気の自然像』……石田　秀実……五七三
古西義麿『緒方洪庵と大坂の除痘館』……中山　沃……五七四
村松学佑『甲斐国医史』……荒木　幹雄……五七五

《本号の表紙絵》

吉益東洞自筆「範学一則」

斯界の碩学、宗田一先生が亡くなられてから、はや7年以上になる。周知のとおり先生の厖大な古医学資料のコレクションは国際日本文化研究センターに寄贈されて、安住の地を得た。今回の表紙絵はその1つである。

吉益東洞（1702〜1773）、名は為則、字は公言、通称は周助。安芸広島の人。19歳で医を志し、張仲景の医方の研究に傾注し、元文3年（1738）京都に上り医を行い、40歳過ぎて山脇東洋に認められてからは大いに名声を博し、古方派の雄として当時の医界を煽った。主著に『類聚方』『薬徴』『方極』『古書医言』ほかがある。この「範学一則」1紙は東洞の自筆で、楷書に近い字体で書かれ現存する数少ない東洞の遺墨の一つ。これは自著『類聚方』もしくは『方極』の巻尾余白に自ら署して弟子に書き与えたもので（『東洞先生遺稿』にその旨見える）、のちにそれを外して一枚物としたらしい。学問には思考することが必要であると説いている。訓読すれば次のようである。「二三子に告ぐ。之を学ぶこと之有るも、思わざるや得ず。之を思うこと之有るも、学ばざるや得ず。吾、之を学ぶ者を覩るも、未だ能く之を思う者を見ず。『管子』に曰く、『之を思い之を思い、又重ねて之を思う。之を思いて通ぜずんば鬼神将に之を通ぜんとす。鬼神の力に非ざるなり。精気の極みなり』と。小子、諸を思え。右与う。明和四丁亥（1767）春、吉益為則書す」。印記の「公言」は東洞の字。

（小曽戸洋・町泉寿郎）